

多言語で書かれた
ごみの捨て方などの
生活ルール。

多言語で書かれた
「バイク進入禁止」。



私の
フィールド
ワーク

日本の団地に暮らす ベトナム人の言語教育

安達真弓 あだちまゆみ / 人間文化研究機構

「多文化を感じられる場所」として最近
テレビでもよく取り上げられているいちよう団地。
フィールドワークを通して見えてきたものは、
今まさに多文化が多文化ではなくなろうとしている現実でした。



神奈川県営いちよう団地

私の専門は言語学です。特に、1人の話し手が2つ以上の言語を使う状況に興味を持っています。その具体例として、ベトナム戦争により日本に移住したベトナム難民が、ベトナム語と日本語をどのように使い分けているのかについて調査しようと考えました。

今回は、私の調査地である神奈川県営いちよう団地について紹介したいと思います。私はここに住んでいるベトナム人の言語と生活について、聞き取り調査やアンケート調査を行っています。

いちよう団地は、神奈川県横浜市と大和市にまたがる大きな団地です。現在この団地には約3,300世帯が暮らし、その3割程度が外国につながる世帯だと言われています。

ベトナム戦争が終わった1970年代後半以降、8,600人を超えるベトナム人が難民として日本に渡ってきました。1998年

まで神奈川県大和市には難民定住センターが設置され、そこで就職先の紹介などが行われていたため、今でも大和市周辺に住んでいるベトナム難民出身者が多くいます。

この団地の中を歩いていると、ベトナムレストランや雑貨店の他にも、日本語だけでなくベトナム語、中国語、ポルトガル語などで「バイク進入禁止」と書かれた看板や、「ようこそ図書館へ」と書かれたチラシ、バスの乗り方やごみの捨て方の案内などを目にするすることができます。

市民団体・多文化まちづくり工房

1994年、ボランティアたちがいちよう団地に暮らす外国人のための夜間日本語教室を開設しました。ここでは週に2回、少人数のグループに分かれて会話や文法の練習が行われています。私はこの教室で2007年からボランティアを行っています。

この教室を主宰する市民団体・多文化まちづくり工房は夜の日本語教室の他にも、日本語での携帯電話の解約の仕方といった生活相談や、高校受験のための放課後教室、小

中学生のための放課後教室。



学校に上がる前に鉛筆の持ち方などを練習するプレスクール、各クラスの参加者が一堂に集まるBBQなど、様々な活動を行っています。

今、いちょう団地で話されていることば

ボランティア活動も行いつつ足繁くいちょう団地に通い詰めた結果、難民として来日した親世代のベトナム人は主にベトナム語を話し、その子どもたちは主に日本語を使って生活していることが分かってきました。「自分の子どもにベトナム語と日本語のバイリンガルになってほしい」と望んでいる親が多いにもかかわらず、その希望通りにはなっていないのが現状です。調査を始めた当初は私も、「ベトナム人の若者たちは、ベトナム語と日本語を自由自在に切り替えながら話している」と思い込んでいました。

いちょう団地に暮らすベトナム人の子どもにとって、人生の分かれ目となるのは、公立高校の入学試験です。小学校や中学校は義務教育ですが、高校で教育を受けられるかどうかは、今後の就職の機会に直結しているからです。

いちょう団地の小・中学校に通うベトナム人の生徒の多くが、高校入試に合格するために頑張っている様子を隣で見ていると、親世代が話しているベトナム語ではなく、日本語中心の生活になっていくことはやむをえないと痛感します。

現在日本には、ベトナム人向けの民族学校はありません。ですから、ベトナム人の子どもの多くは、日本語で授業の行われている公立学校に通うことになります。ベトナム語の通訳の先生のサポートや、難しい日本語を使う国語や社会の時間は別室で個別の授業を受けてもよいといった支援体制は用意されているものの、ベトナム人の子どもたちは、基本的には日本語のみを話す児童・生徒たちと同じ授業を受けています。

理想のベトナム語教室

忙しい授業の合間をぬって、ベトナム語の歌を歌ったり、伝統衣装のアオザイを着て踊ったりする小・中学校のクラブ活動に参加するベトナム人の生徒もいます。しかしながらいちょう団地では、子どもたちが授業形式でベトナム語を学ぶ機会はありません。

日本語教室の主催者によれば、いちょう団地のマイノリティの若者は、高校卒業前後の進学や就職、結婚に際し、名前や国籍を変更するかどうかという問題に直面することが多いのだそうです。そしてそのような決断を迫られた時にこそ彼らは、自分のルーツやアイデンティティを強く自覚し、ベトナムの言語や文化の勉強に興味を持つことがあるのだそうです。よって、小・中学生向けの教室だけでなく、将来のキャリアの選択肢を増やせるように、大人への階段を上っている時期の若者向けのベトナム語講座があってもよいのでは、と語ってくださいました。

実際、私がボランティアをしている夜の日本語教室のメンバーは以前何度か、いつもの日本語の教室が始まる前に、ベトナム語を勉強するために集まっていたことがありました。この集まりでは、日本語教室とは逆に、日本語教室で日本語を学ぶベトナム人が日本人のボランティアスタッフにベトナム語を教えるという形式を取っていました。しかしながら、この試みはあまり長くは続きませんでした。日本人メンバーにとってはベトナム語を学習するモチベーションを保つのが難しいという事情があったようです。さらに、先生役である若いベトナム人たちは、これまでに数回しかベトナムに帰国したことがないので、ベトナム語とベトナム文化を教えられるだけの自信が持てていないように見えました。特に私のような、ベトナムへの留学経験のある参加者がいると、間違いを指摘されるのではないかと感じ、相当やりにくかった

いちよう団地まつりのステージ。



ベトナムの伝統衣装・アオザイを着て、菅笠を持って踊っている高校生。



試食コーナー。ベトナムのココナツのお菓子「バンイユア」。



ベトナムのもつ煮「ファアラウ」。



多言語による防災指導（AEDの使い方など）。



ネオンの色使いにベトナムの屋台の雰囲気再現されている。ベトナム風バゲットサンド「バインミー」。

のではないかと思います。結果的に、日本人スタッフとしても、ベトナム人の若者がベトナム語を無理やり教えさせられたり、学ばされたりしてベトナム語のことを嫌いになってしまうよりも、いつもの日本語教室の形に戻った方がよいのでは、という話になりました。

この現実に研究者としてどう向き合うか

先日とある学会で、「いちよう団地ではベトナム語ではなく、主に日本語が話されている現状」について、「子どもの教育や就職の機会といった実益」の観点から説明を試みたのですが、発表後、聴衆から、「日本のベトナム人の若者は、ベトナムと日本という2つの確固としたアイデンティティを持っているはずで、ベトナムに対する懐かしさといったものが言語の使用にも影響しているのではないか」とか、「あなたは本当にフィールドに通っているのか。もっと事実を詳細に観察するように」といった手厳しいコメントをいただきました。

現実が（以前の私を含めた）研究者の理想と異なることは受け入れる他ないとしても、フィールドに通っていると、「私の研究は、一体何の役に立つのだろう」と考えることがあります。現時点で私ができることの一つとして、学会発表やこの原稿のような作文を通して、ボランティアによる支援だけでは立ち行かなくなっているいちよう団地の今について多くの人々に知ってもらい、ということがあると思います。そして、子どもの教育の選択肢を増やすため、高校入試資格の緩和や、マイノリティの言語や文化を学ぶ機会の保障といった公的なサポートが必要なることを、草の根レベルで訴えていきたいと考えています。

いちよう団地は、毎年10月の第1土曜日と日曜日に開催されるいちよう団地まつり以外には、多国籍を感じるイベン

トが頻繁に開かれないせいか、普段は他の日本の団地とあまり変わらない雰囲気です。一方、先日調査で訪問したオーストラリアのシドニーとメルボルンのベトナム人街は、ベトナム語の看板を掲げたベトナム料理店がずらっと立ち並び、店の中でも外でもベトナム語が飛び交い、まるで本国ベトナムさながらといった活気あふれる街の雰囲気でした。いちよう団地とオーストラリアのベトナム人街では何が違うのか—コミュニティの規模なのか、社会の仕組みなのか、政府の言語に関する政策なのか—といったことについて考えてみることも今後必要だと思っています。

増えるベトナム人

日本には、2018年時点で、30万人近くのベトナム人が暮らしています。この20年で見れば、その数はなんと22倍に増えていることになります。

その中で、この読み物で紹介した日本に住み続ける選択をした難民出身者は、最近急激に増えているベトナム人留学生や技能実習生と比べれば、数で言うはずと少ないです。留学生や実習生は、滞在できるビザの関係上、留学や実習を終えた後はベトナムに帰国することが予想されます。今後は、日本にいる期間とことばを使う上での特徴の違いについても調査を行ってみたいと考えています。

謝辞

調査の実施に快くご協力いただいている、市民団体・多文化まちづくり工房の関係者の皆様、そして早川秀樹代表に、この場を借りて感謝申し上げます。

